

モルディブにおける国内観光  
——グローバルなツーリズムにおけるヴァナキュラーなリゾート文化——

安田 慎\*

Domestic Tourism in Maldives:  
Vernacular Resort Culture in Global Tourism

YASUDA Shin

Resort culture has been pivotal in global tourism since the late 19th century, based on the Western values and norms within mass tourism. Seen as temporary spaces for leisure that temporarily displace daily life, tourist resorts attract affluent international tourists worldwide and are considered valuable tourism resources. However, the global spread of resort culture is seen as an example of homogenisation in tourism, causing tensions with regional cultural values and norms, particularly in Islamic countries. Tourism development in the Maldives has sparked interactions and conflicts between global tourism and local communities. Concerns about the impact on Islamic values led to initial caution in the tourism industry, restricting activities on local islands to balance tourism promotion and Islamic values. Despite historical tourism policy in the country, resort culture has become entrenched in Maldivian society, adopted domestically as a leisure activity. Nature and cultural experiences associated with resorts have gained popularity, challenging the perception of global tourism conflicting with local values. The deliberate separation of global tourism and local communities has given rise to a distinctive Maldivian resort culture, showcasing a complex interplay between global tourism and local practices. These dynamics emphasise the coexistence of global tourism and indigenous values, shaping a unique Maldivian resort culture that promotes sustainability.

## I. はじめに

西洋社会の価値規範や行動様式に基づいて形成されたリゾート文化は、19世紀後半以降の国際観光市場の拡大のなかで重要な地位を占め続けている。マス・ツーリズム(大衆観光)の発展のなかで形成されてきたリゾート文化は、西洋近代社会を形作る重要な社会実践であったと言える[コルバン 1992, 2010; アーリ 1995; ボワイエ 2006]。観光行動の対象となる一過性の空間である観光地に対して、「一定の頻度で訪れ日常生活を一時的に移転させる余暇活動」[稲垣 2011: 70]として捉えられるリゾートは、長期間にわたるバカンスや多様な余暇活動を内包する実践として捉えられてきた。現代においても世界各地に広がる高原リゾートや海浜リゾート、温泉リゾートの数々は、大衆の余暇活動として受容されながらも、世界各地の富裕層を中心とした観光客を集める貴重な観光資源として、観光振興策のなかでも議論が展開されている[Prideaux 2000]。

他方で、国際観光市場におけるバカンスやリゾート地の拡大といったリゾート文化の浸透は、グローバルなツーリズムによる世界の画一化を示す格好の事例として捉えられてきた[江口 1998; ナッシュ 2018(1979)]。実際、世界各地のリゾート地では、主たるターゲットとする富裕層の西洋人観光客の価値規範や選好に応じた観光商品・サービスを展開していくことを、ツーリズムにおける最先端として捉えてきた。それゆえ、世界各地の観光戦略において、リゾート地の建設と育成と

\* 高崎経済大学地域政策学部准教授

は、西洋近代の価値規範や行動様式を受容することと同義とされてきた [Hazbun 2008; ミッチェル 2014]。

世界各地で同一の規格で建設されていくリゾート施設は、地域社会とのさまざまな軋轢を生み出してきた。南北問題にみられる経済格差を背景とした権力関係を指摘することもできるが [江口 1998; ナッシュ 2018(1979)]、それ以上に現地の文化的・倫理的な価値規範との軋轢が話題になることが多い [Ritter 1975; Din 1989; Cooper & Ozdil 1992; Hazbun 2008; ミッチェル 2014; 安田 2016]。特にイスラーム諸国では、リゾート文化は時に現地のイスラーム的価値規範や行動様式を破壊するものとして、社会のなかから分離・排除してきた歴史がみられる。

インド洋に浮かぶ環礁国であるモルディブにおいても同様に、グローバルなツーリズムが地域社会と接触するなかで、さまざまな交流と軋轢を生み出してきた [Scheyvens & Momsen 2008; Scheyvens 2011; Shakeela & Weaver 2012; Robinson 2015; Buckley et al. 2017; Muneeza et al. 2020]。モルディブでは1970年代から国際観光客の受け入れを拡大していく過程で、世界でも有数の富裕層向けの高級観光リゾート地を形成してきた。サンゴ礁に囲まれた1つの島を1つの高級リゾート・ホテルのみが占有し、贅を尽くしたヴィラやビーチに彩られた数々の施設を取り巻く環境は、西洋人観光客を中心に、世界各地の富裕層を強く惹きつける場所となっている。

高級リゾートが国内各地で展開していくなかで、モルディブにおけるツーリズムとは、国際観光客を受け入れて経済発展を達成する手段として捉えられてきた [Scheyvens 2011; Robinson 2015]。他方で、イスラームを国教として、「国民の100%はムスリムである (saththain saththa muslim qaum)」、あるいは「100%ムスリム国家 (satheykain satheyka muslim qaum)」と自称してきたモルディブにおいて [Zahir 2021: 98]、グローバルなツーリズムの地域社会への浸透は、基本的には個人や社会に息づくイスラーム的価値規範を犯す実践として警戒もされてきた [Kundur 2012]。実際、モルディブ観光省も2000年代中葉まで、外来のツーリズムやリゾート文化が地域社会の自然環境や文化的・倫理的な価値規範を破壊するものであるとする理解を継続してきた点が、観光振興計画からもうかがい知ることができる [MoT 2007: 58–60]。

それゆえ、モルディブでは観光活動は無人島を開発した「リゾート島 (resort island)」に限定し、「ローカル島 (local island)」と呼ばれる地域住民が在住する島への観光客の入域や観光活動を厳しく制限してきた [丁 2021a, 2021b]。実際、現在でもリゾート島では肌の露出やアルコール飲料の販売や消費が認められている一方で、ローカル島ではこれらの行為が原則認められていないという、観光振興とイスラームの堅持を両立させる動きがみられる。

一連の観光振興のなかで、モルディブ社会のツーリズムやリゾート文化は、国外の観光客がもたらす外来の文化や実践として、地域社会に根付くイスラームの価値規範や行動様式とは相容れないものとしてきた [Scheyvens 2011; Kundur 2012; Muneeza et al. 2020]。そこでは常に、グローバルで外来のツーリズムは、ローカルなイスラームと対立関係にあるとする構図で捉えられてきたと言える。

他方で、2010年代以降リゾート文化がモルディブ国民の観光活動・余暇活動の一つとして定着するに至っている。2016年にモルディブ観光省によって行われた国内観光に関する調査においても、自然体験・文化体験のアクティビティを核とする、余暇・休暇目的のリゾート文化が、国内観光において一定のシェアを占めている点があげられる [MoT 2016]。そこでは、モルディブ各地のリゾート島において他の観光客と同様にバカンスを楽しむ様子や、ローカル島において地域固有の文

化や地域住民との交流を図っていく姿を見出すことができる<sup>1)</sup>。

グローバルなツーリズムとローカルな地域社会を意図的に分断することで発展してきたモルディブ社会において浸透するリゾート文化の背後には、ヴァナキュラーな形でツーリズムを受容する社会環境が生み出されてきたことを示唆している。そこで本論考では、モルディブにおける国内観光の発展を事例に、国際観光市場におけるヴァナキュラーなリゾート文化の形成について考察していきたい。その際、モルディブにおける国内観光の特徴と、リゾート文化への影響を明らかにしていく。

本論考ではツーリズムとリゾート文化をめぐる研究を概観したうえで、モルディブにおけるリゾート文化と国内観光の発展を追っていきたい。そこでは、1島1リゾート戦略のもとで、富裕層の西洋人観光客を受け入れるために受容してきたリゾート文化がリゾート島において展開される一方で、イスラームの価値規範を基盤とする地域社会との軋轢を生み出してきた点を明らかにする。そのうえで、国内観光においてリゾート文化がいかに受容されてきたのかその現状を描くとともに、モルディブ社会が担うヴァナキュラーなリゾート文化をめぐる社会的文脈について探ってきたい。

## II. ツーリズムにおけるリゾート文化をめぐるグローバルとヴァナキュラー

観光をめぐる実務や研究において、リゾート文化は西洋社会における富裕層の価値規範や行動様式を反映して形成された社会実践として捉えられてきた [コルバン 1992, 2010; アーリ 1995; ポワイエ 2006]。そこでは、労働と余暇という近代西洋社会が構築してきたライフスタイルを背景に、非日常における余暇活動を通じて、心身のリラックスや健康の回復、幸福を達成して日常としての労働に戻っていく構図が描き出されている。例えばジョン・アーリは、19世紀前半のイギリス南部における海浜リゾートの発展をみていく過程で、遊歩散策や海水浴を通じた工場労働者たちの心身のリフレッシュに適した環境が海浜において発展した歴史を示している [アーリ 1995: 28–70]。アラン・コルバンも同様に歴史資料を紐解きながら、フランス南部においてビーチ・リゾートが発展していく過程を描き出していく [コルバン 1992, 2010]。欧州各地における海浜リゾート以外の観光地の形成についても、イギリス南西部バースやドイツ南部のバーデン・バーデンに代表される温泉リゾートの発展や [シュタイネッケ 2018]、スイスにおける高原リゾートの発展にも同様の構図を見出すことができる [森本 2023]。

20世紀を通じた国際的なマス・ツーリズム (大衆観光) の浸透にともなって、心身のリフレッシュを目的とするリゾート文化は、世界各地の文化的差異に関わらず、人類にとって普遍的な価値をもつ実践として広がっていく [高寺 2006]。実際、リゾート地がもたらす効用をめぐる観光研究において多様な議論が展開され、20世紀を通じて文化や価値規範の違いに関わらず、人類が享受すべき権利として捉えられてきた。しかし、世界各地で規格化された形で広がるリゾート施設は、地域固有の文化や価値規範を無視し、地域社会のなかで存続してきた社会生態システム (socio-ecological system) を破壊するものとして、軋轢を生み出してきた [江口 1998; Richins 2009; ミツチェル 2014; Cowburn et al. 2018; ナッシュ 2018(1979)]。

マス・ツーリズムの発展にともなうリゾート文化の世界的な広がり、非西洋社会において

1) 筆者の2020年3月におけるモルディブの観光関係のインフォーマントとのインタビューにおいても、モルディブ人が国内のリゾート島やローカル島のゲストハウスでの旅行を享受するようになっている点や、マレ首都圏の住民を中心に国内観光がにわかブームになっている点を語ってくれた。

は西洋近代社会が蓄積してきた価値規範や行動様式の押しつけとも捉えられてきた〔江口 1998; Hazbun 2008; ミッチェル 2014; ナッシュ 2018(1979)〕。その背景には、ロバート・B・エジャートンが『ビーチの社会学』のなかで指摘するように、ビーチにおけるアクティビティが、西洋近代が積み重ねてきた価値規範や行動様式を暗黙のうちに反映し、ビーチを楽しむ人びとの間で共有されている点あげられる〔エジャートン 1993〕。しかしそれは同時に、西洋近代の価値規範や行動様式を身につけていない人びとを暗黙のうちに排除する社会的装置としても機能してきたと言える<sup>2)</sup>。それゆえ、ツーリズムは時に人びとの憎悪の対象としても捉えられてきた。

従来は国際観光市場におけるリゾート文化から排除されてきた人びとではあるが、彼らはローカルな文脈に沿ったリゾート文化を創出し、世界各地のリゾート地で独自の観光実践を展開するようにもなっている〔Richins 2009; Giampiccoli et al. 2020〕。例えばイスラーム諸国では、イスラームの価値規範に基づいたイスラミック・ツーリズムが広がりを見せるなかで、イスラミック・リゾートやハラール・リゾートと呼ばれる観光地が形成されるようになってきている〔安田 2016〕。これらのリゾート地では食事や礼拝の設備の整備に加えて、公共空間における男女の分離を徹底することによって、安心してリゾート文化を享受できる環境を整備することで、従来の西洋近代社会の価値規範や行動様式のなかで排除されてきたムスリム観光客のリゾート需要を掘り起こしてきたと言える。

その他にも、南アジアにおいても英領植民地時代から各地に広がってきたリゾート地が、国内観光の隆盛とともにインド人の価値規範や行動様式に合わせた形で意味づけ直されていく動きがみられる〔Singh 2004〕<sup>3)</sup>。ここでは、インドの地域社会のなかに根付く価値規範や行動様式のもとで、心身の健康や幸福の拡張といったリゾート文化が積み重ねてきたものを展開しようとしている。

これら世界各地でローカル化が進むリゾート文化は、地域社会それぞれに息づく社会生態システム (socio-ecological systems) が、ヴァナキュラー (在野のもの) という形で表出してきたと捉えることができる〔Galan et al. 2020〕。これらの議論では、個人や社会に埋め込まれた価値規範・行動様式によって育まれてきた社会生態システムが、グローバル化するなかでも持続している点を、レジリエンスやサステナビリティといった概念を絡ませながら議論している。あるいは、グローバルなツーリズムによってもたらされたリゾート文化がローカル化していく過程で、リゾートでの諸実践がヴァナキュラーな価値規範や行動様式を生み出し、社会に浸透させる役割を果たしている点を明らかにしている。

### III. モルディブにおける観光振興とグローバル／ローカル

#### 1. モルディブにおける観光振興とリゾート文化

本論考の研究対象として取り上げるモルディブ共和国 (Dhivehi Raa'jeyge Jumhooriyya) は、インド洋上に浮かぶ環礁国であるとともに、SIDS (Small Island Developing State) に分類される、世界のなかでも最も観光に依存する国家の1つである〔Scheyvens & Momsen 2008; Scheyvens 2011; 丁 2021a, 2021b; MoT 2023b〕。国内に1200島近くある島嶼国であるモルディブでは、国土面積300km<sup>2</sup>のうちの200島近い場所に、人口40万人近くが居住している〔MoT 2023b〕<sup>4)</sup>。国土全体で

2) それゆえ、社会的にツーリズムに参画したい人びとは、西洋近代の価値規範や行動様式を是認して身につけていくことが必須の条件となってきた〔Ritter 1975; Din 1989; Hazbun 2008〕。

3) 本特集の小牧論考も、同様の視点でインドのテーマパークを議論しているものである。

4) 特に、首都マレでは特に少ない住環境スペースのなかに多くの住民が住んでいるために、人口密度が1300人/km<sup>2</sup>という世界で最も人口密度の高い場所としても知られている。

の少ない耕地面積や希少な水をはじめとする諸資源を国内で確保することが困難であり、産業育成も遠洋漁業以外の産業は国外に依存してきた [Kundur 2012; 濱田 2021a, 2021b]。この環境下でモルディブは、サンゴ礁を中心とする海洋リゾートの開発を通じて、富裕層の西洋人観光客や新婚旅行者を受け入れる観光振興戦略を展開し、結果として観光に重度に依存する経済・社会環境を作り上げている<sup>5)</sup>。

この国際観光客を対象とするリゾート文化は、モルディブにおける観光振興戦略とイスラーム化政策のなかで構築されてきたものである。モルディブは観光戦略では歴史的に、「1島1リゾート戦略 (one island one resort)」と呼ばれる富裕層の観光客に特化した観光戦略を展開してきた [Domroes 2001; Scheyvens 2011; Travis 2011; 丁 2021a, 2021b]。1島1リゾート戦略では、観光消費の高い少数の観光客を受け入れるリゾート地に特化して開発していくことで、低開発を通じた自然保護や、持続可能な観光振興による経済利潤を得る一方で、観光による地域社会への文化的・社会的影響を最小限に抑えるものであった [Scheyvens 2011: 152; Travis 2011; Shakeela & Weaver 2017]<sup>6)</sup>。

モルディブにおけるリゾート文化の核となってきた1島1リゾート戦略は、1979年に制定された旧モルディブ観光法 (Law on Tourism in the Maldives, No. 15/79) と、それに付随する一連の法律 (law)、規定 (regulation)、ガイドライン (guideline) を通じて体系化されてきたものである [Travis 2011; Kundur 2012]<sup>7)</sup>。旧モルディブ観光法では、自然保護と持続可能な観光開発を目指す点が謳われ、その指針に基づいた各主体の観光行動の規制に焦点が当てられてきた [Kundur 2012: 3; Shakeela & Weaver 2017]。具体的には、観光産業 (宿泊業、旅行業) の営業を観光省の認可制とする点や、観光税に関わる諸規定が定められてきた [Kundur 2012: 3; Shakeela & Weaver 2017]。さらに、観光活動を住民が住んでいない無人島 (リゾート島) と海洋上のポートに限定するとともに、それまで行われていた住民が居住するローカル島での観光活動を一切禁ずるものでもあった [Shakeela & Weaver 2017: 8, 16]<sup>8)</sup>。

一連の旧モルディブ観光法を頂点とする法体系の整備を通じて、モルディブでは観光客が滞在する「リゾート島」と、モルディブ国民が居住する「ローカル島」を明確に区分して開発を行ってき

- 
- 5) 以上の環境のなかで、モルディブは観光に多くを依存する社会環境を生み出してきた。そのなかでも、サンゴ礁の環礁や海洋生物を中心とした、インド洋の豊かな自然資源を観光資源として生かすことで、西洋諸国を中心に多くの観光客を惹きつけてきた [MoT 2023b]。特に、国内に約110強存在する「リゾート島」と呼ばれる1つの島を1つのホテルが占有する高級観光リゾートや、サーフィンやダイビングといったマリンスポーツをはじめとする海洋資源を活用した観光活動の数々は、多くの人びとを集める観光地となっている。さらに、ハネムーンの旅行先としての人気も博し、日本ではサーフィンやダイビングによる訪問者よりも多くの新婚旅行者たちの旅行先として人気を集めてきた [丁 2021a, 2021b]。観光産業のGDPも全産業の30%以上に達するとともに、関連産業を含めると観光に重度に依存した経済・社会構造を認識することができる [MoT 2023b]。
- 6) 実際、2023年現在でもピーク時で1泊500米ドル (約75,000円) を標準とする高級ビーチ・リゾートに焦点を絞った観光戦略は、小規模の富裕層の顧客からより多くの利益を得るビジネス・モデルを普及させてきたことを示している。
- 7) この旧モルディブ観光法は、関連するさまざまな法律や規則、ガイドラインを通じて、法体系としてモルディブ国内の観光活動を規定していくことになる。例えば、外国投資法 (Law on Foreign Investments in the Republic of Maldives, No. 25/79) では、観光に投資する際には観光省の認可が必要な点や (第1条b項、第2条)、税制に関わる優遇措置 (第14条) で、旧モルディブ観光法との連携がとられてきた。その後出された観光投資や観光リゾートの投資や運用に関わるさまざまな規則やガイドラインをまとめる形で、1994年には観光リゾート法 (Law on Leasing of Uninhabited Islands for the Development of Tourist Resorts, No. 03/94) が制定され、旧モルディブ観光法での指針を踏まえた法規範や規則が充実していく [Shakeela & Weaver 2017]。
- 8) その他にも、自然保護のためにリゾート島内の樹木の伐採をはじめとした島内の植生に手を入れるのに観光省の事前許可が必要な点や、島全体の面積の20%以下に建設を制限するガイドラインを策定し、運用していくことで観光法の描き出す環境保護と持続可能な観光開発の指針を保持しようとしてきた [Kundur 2012: 3]。観光客についても、肌の露出 (例えば、水着や肌を露出した服装で街中を歩き回るといった行為) やギャンブルの禁止、指定された区域以外での観光活動を厳しく制限する措置が取られてきた [Shakeela & Weaver 2017: 8]。

た。観光振興を地域社会と分離してきた背景には、1970年代から1980年代にかけて当時の大統領マウムーン・アブドル・ガユームを中心に展開されてきたイスラーム化政策の存在を見て取ることができる〔Scheyvens 2011; Robinson 2015; 箕輪 2019; Zahir 2021〕。エジプト・アズハル大学においてイスラーム学を修めたガユームは、モスクの建設や宗教教育の充実、シャリーアに基づく法体系の整備を通じて国民向けのイスラーム化政策を振興しながら、経済面では外部からの観光客や国外からの投資を積極的に受け入れる観光振興によって、国家の経済発展と社会統合を同時に推し進めようとしてきた〔Robinson 2015〕。両者を推進するために、観光政策では観光客と地域住民の分離を徹底し、両者の接触を最小限に抑えることによって、観光による反イスラーム的な価値規範の流入を最小限にしながら国家収入を増やす戦略を描いていく。ここにグローバルなツーリズムとローカルな生活文化の分断が、社会環境として生み出されてきたと言える〔MoT 2007: 58-60; Shakeela & Weaver 2017〕。

## 2. モルディブ観光政策の転換とリゾート文化

旧モルディブ観光法のなかで構築されてきた観光システムは、外資企業やモルディブ政府、一部エリートに集中する観光関係の利権と不均衡な利益分配をめぐる社会的な歪みを生み出す要因ともなってきた〔丁 2021b; 濱田 2021b〕。特に、観光によって生み出される莫大な観光収入の多くが、外資の観光企業や国内の政府高官・経済エリートに還元される不均衡な利益分配のなかで、全体の収益に比して一般国民に還元される割合は低く、観光の利益を享受できない多くの国民からの不満の種となってきた〔Henderson 2008; Scheyvens 2011〕。この「観光のジレンマ」とも呼び得る不均衡な経済・社会関係は、政治不信やツーリズムそのものに対する憎悪を生み出す温床ともなってきた〔Shakeela & Weaver 2012; 丁 2021b; 濱田 2021b〕<sup>9)</sup>。

上述の国内での不均衡な社会環境を是正するために、モルディブでは1999年の新モルディブ観光法<sup>10)</sup> (Maldives Tourism Act, No. 02/99) や、第3次観光マスター・プラン(2007~2011)を通じて、観光政策の転換を図っていく〔MoT 2007; Kundur 2012; Shakeela & Weaver 2017〕。そこでは、モルディブの観光ブランド戦略の中核を担ってきた高級観光リゾートを核とした1島1リゾート戦略から、地域住民が住むローカル島での観光活動やゲストハウス経営を核としたコミュニティ・ベースド・ツーリズムも積極的に導入しようとするものであった〔MoT 2007; Giampiccoli et al. 2020〕。そのなかで、1999年の新モルディブ観光法の法体系を維持しながらも、よりモルディブ各島の地域コミュニティに基盤を置いた観光政策を展開していく。この路線は第4次観光マスター・プラン(2013~2017)、第5次観光マスター・プラン(2023~2027)を通じて、現在まで引き継がれている〔MoT 2013a, 2013b, 2023a〕。

1999年の新モルディブ観光法においても、「観光による経済利潤の社会への公正な分配を保証し、観光を自然資源の保護と保全のためのツールとし、国における文化遺産を保護し、活性化するための起爆剤としていく」点が理念として謳われ、環境保護や地域文化保護を通じた社会的公正の実現が強調されるようになる〔Travis 2011: 71〕。観光を通じた社会的公正を実現するために、観光活

9) 実際、政治不信と観光に対する憎悪は、テロ事件という形で表出することになる。2007年11月には、首都マレの広場で観光客を狙った爆破テロ事件が起こり、日本人2名を含む12名が負傷するという惨事になっている。その他にも多くのテロ事件が起こるなかで、モルディブにおいて観光は政治的イシューとなってきた。

10) 1999年モルディブ観光法については、2004年(No. 23/2004)、2010年(No. 20/2010)、2012年(No. 05/2012)、2014年(No. 04/2014, No. n.d./2014, No. 42/2014)、2015年(No. 08/2015)、2016年(No. 13/2016)、2018年(No. 13/2018)と9度の改正を行っている〔MoT 2019〕。

動への参画要件を緩和するさまざまな措置が取られてきた [Kundur 2012]。特に、これまで外資企業や政府系企業といった大規模な資本を持つ観光企業のみが参画してきた状況を改善し、国内の中小企業や地域住民の積極的な参画を促す施策を展開するようになっていく。

新モルディブ観光法を踏まえた第3次観光マスター・プラン(2007～2011)では、経済格差や地域格差を解消するために、1島1リゾート戦略を核とするツーリズムとローカルを分断した社会環境の抜本的な修正を図っていくことになる。具体的には、ローカル島における観光活動やゲストハウス経営の解禁を核としたコミュニティ・ベースド・ツーリズムを普及させることで、ローカル島における地域経済や地域コミュニティの活性化や、地域ネットワークの強化を促す戦略を描き出してきた [MoT 2007: 59–60; Shakeela & Weaver 2017]。特に、各ローカル島における地域文化や地域資源を積極的に活用することで、旧モルディブ観光法の下では観光産業に参画できなかった人びとを積極的に取り込んできた [Shakeela et al. 2010; Buckley et al. 2017; Muneeza et al. 2020]<sup>11)</sup>。

ローカル島の観光活動の開放とゲストハウスを核としたコミュニティ・ベースド・ツーリズムの積極的な導入は、モルディブの観光客層を変えるとともに、モルディブ社会の在り方も変えていくことになる。特に、各ローカル島において観光活動が始まり、ゲストハウスが開設されていくと、その周辺での個人経営の小規模レストランやカフェ、売店、旅行会社の開設が相次ぎ、地域全体で観光客の消費をシェアする動きが出てくる。これらの観光を通じた地域ネットワークが構築されていくなかで、地域文化に根差した新たなモルディブの観光ブランド・イメージが構築されていくことに繋がってきた [Shakeela & Weaver 2017; 箕輪 2019]。そのなかで、観光客向けの各ローカル島の地域文化や郷土料理を紹介する観光プログラムが充実するとともに、モルディブ国内でのローカル文化振興にもつながっていく。

#### IV. ヴァナキュラーなリゾート文化とサステナビリティ

##### 1. モルディブにおける国内観光をめぐる現状

1島1リゾート戦略を基軸として発展してきたモルディブにおいて、ツーリズムと地域社会は分断されていたものとして把握されてきた。しかし、2000年代後半以降の観光政策の転換のなかでツーリズムと地域社会は徐々に歩み寄りを見せていくようになる。両者の歩み寄りのなかで発展してきたヴァナキュラーなリゾート文化は、国内観光のなかに見出すことができる。

国内観光の状況については、モルディブ観光省による『モルディブにおける国内観光に関する研究 2016 (Study on Domestic Tourism in the Maldives 2016)』 [MoT 2016] の調査レポートのなかで議論されている。家計調査と全国規模のサンプリング調査に基づいて実施された本調査レポート<sup>12)</sup>では、表1と表2にあるようにモルディブ全体で69%の世帯が1年に1回以上の国内旅行を実施し、年平均で国内旅行を2.84回(宿泊を伴う旅行で1.29回、日帰り旅行で1.55回)実施している点を明らかにしている [MoT 2016: 12–13, 28]<sup>13)</sup>。月別にみると、学校の長期休暇(6月と11–12月)

11) これらの地域の中小規模の観光開発を支援していくために、政府と民間の共同出資(政府45%、民間55%)による Maldives Tourism Development Corporation (MTDC) や、政府が100%出資した中小企業向けの Maldives Integrated Tourism Development Corporation (MITDC) といった観光開発会社を新たに設立してきた [Kundur 2012: 4]。その他にも、中小の観光会社向けの融資を充実させることや、各島における官民のパートナーシップの構築によって、観光を核とする地域コミュニティの構築を積極的に推進してきた。

12) 調査にあたっては、対面での調査票によるアンケート調査方式で実施している。マレ首都圏で600世帯、環礁部で550世帯のアンケート調査を実施、合計1128を回収している。環礁部については、北部で198、中部で194、南部で150のサンプル数である。質問への回答は、世帯主か世帯に責任を持つ人に行ってもらっている [MoT 2016: 6–7]。

13) 国外旅行については、1年のうちに52.9%の世帯が実施している [MoT 2016: 28]。

やイード・アル＝アドハーの時期に多く、家族旅行として国内旅行を行っている点をうかがい知ることができる [MoT 2016: 16]。宿泊日数についても1～3泊が割合において最も多く(35%)、4～7泊(32%)、8～15泊(19%)、16～30泊(11%)、31泊以上(3%)となっている [MoT 2016: 19]。

表1——国内観光・国外観光に行った世帯の割合 (単位 %)

	環礁部	マレ首都圏	全世帯
国内旅行	74.9	59.8	69.0
国外旅行	49.2	58.8	52.9

出典 [MoT 2016: 28]

表2——1年の間に国内旅行に行った回数 (単位 回)

	環礁部	マレ首都圏	全世帯
宿泊旅行	1.60	0.82	1.29
日帰り旅行	2.18	0.58	1.55
すべての旅行	3.77	1.40	2.84

出典 [MoT 2016: 28]

しかし、マレ首都圏と環礁部では表1や表2で示した通りに傾向は大きく異なり、環礁部の方が国内観光に行く世帯の割合や回数は多い [MoT 2016: 28]。その背景として、表3で示している通り、マレ首都圏と環礁部において旅行目的が大きく異なる点が見られる。国全体としては医療目的(48.4%)が最も多く、余暇・休暇目的(19.8%)、友人・親戚訪問(11.4%)、ショッピング(6.2%)といった項目が続く [MoT 2016: 28]。さらに、表4で示している通り、マレ首都圏から環礁部への旅行では医療目的の他にショッピングや友人・親戚訪問が多いのに対して、環礁部からマレ首都圏への旅行では医療が主たる目的となっている [MoT 2016: 29]。

表3——国内旅行の主たる目的 (単位 %)

	環礁部	マレ首都圏	全世帯
政府ミッション	0.1	2.2	0.5
余暇・休暇	8.8	65.1	19.8
医療	60.0	0.9	48.4
政府サービス	1.6	0.0	1.3
個人ビジネス・仕事	4.6	9.1	5.5
宗教	0.3	0.0	0.3
ショッピング	7.6	0.0	1.0
訓練・修学	3.4	0.4	2.8
トランジット	1.3	0.0	1.0
友人・親戚訪問	9.1	20.6	11.4
その他	2.9	1.7	2.7

出典 [MoT 2016: 28]



表4——マレ首都圏と環礁部における主な旅行目的

(単位 %)

	環礁部からマレ首都圏へ	マレ首都圏から環礁部へ
余暇・休暇	7.9	3.1
医療	74.6	58.7
個人ビジネス・仕事	4.3	0.4
ショッピング	3.4	13.3
訓練・修学	1.0	0.8
トランジット	0.8	0.0
友人・親戚訪問	5.7	22.1
その他	2.2	1.6

出典 [MoT 2016: 29]

国内観光における具体的な活動内容については、マレ首都圏と環礁部では異なったものとなっている [MoT 2016: 32]。表5が示しているように、マレ首都圏と環礁部のいずれの世帯においても、スポーツや自然アトラクションを楽しむ世帯が多い。マレ首都圏の世帯ではスポーツや自然アトラクション、地域の文化活動の体験への参加の割合が高いのに対して、環礁部の世帯では医療やショッピングが他の活動よりも多くの割合を占めている [MoT 2016: 32]。

表5——国内観光におけるアクティビティ<sup>14)</sup>

(単位 %)

	環礁部	マレ首都圏
マリン・スポーツ	19.5	57.5
陸上スポーツ	21.2	43.9
自然アトラクション	22.2	29.0
文化アトラクション	8.1	10.5
フェスティバル・文化活動	6.9	22.2
ショッピング	41.7	9.7
医療・健康サービス	54.1	2.6

出典 [MoT 2016: 32]

表6——宿泊旅行における宿泊場所

(単位 %)

	環礁部	マレ首都圏	全世帯
ゲストハウス <sup>15)</sup>	9.7	13.1	10.6
ホテル <sup>16)</sup>	0.3	0.4	0.3
自宅・アパート	3.2	34.2	11.2
ピクニック・ハウス	0.7	0.0	0.5
レンタル・ルーム	15.4	4.7	12.7
リゾート島	0.2	5.6	1.6
親戚・友人宅	63.8	34.4	56.2
その他	6.7	7.5	6.9

出典 [MoT 2016: 31]

14) 複数回答あり。

15) 環礁部のローカル島における宿泊施設すべてを含む。そのため、ローカル島におけるホテルも、統計上はゲストハウスに分類される。

16) マレ首都圏におけるシティ・ホテル型の宿泊施設。

旅行目的やアクティビティの違いは宿泊場所にも現れており(表6)、全世帯で親戚や友人の家に泊まることが多いのに加えて、マレ首都圏の世帯では自分の家かアパートメントの割合が高く(34.2%)、環礁部の世帯では部屋を借りることが多いといった違いがみられる(15.4%)。他方で、ゲストハウスやリゾート島といった国際観光客が一般的に利用する宿泊施設の需要も一定数ある点も見て取れる [MoT 2016: 31]。

年間の旅行消費額については表7で示している通り、世帯あたりで1万138ルフィア(約657.46米ドル)であり、全世帯の旅行消費額としては6億9200万ルフィア(約4488万米ドル)の規模になると推定している [MoT 2016: 19-20]。また、表8に示した内訳をみると、宿泊費や移動費、飲食費に多くの費用がかかっている実態がみえてくる [MoT 2016: 20-21]。しかし、表7・表8・表9が示すように、マレ首都圏と環礁部では旅費の傾向も著しく異なる点も見えてくる。

表7——世帯ごとの国内観光支出の平均

(単位 ルフィア<sup>17)</sup>)

	世帯ごとの支出	全世帯の推定支出合計
環礁部	14,064	584,000,000
マレ首都圏	4,043	108,000,000
全世帯	10,138	692,000,000

出典 [MoT 2016: 20]

表8——世帯ごとの国内観光支出の内訳平均

(単位 ルフィア)

	宿泊	飲食	航空運賃	海上交通	陸上交通	ショッピング	スポーツ・レクリエーション	文化活動	その他	合計
環礁部	1,603	2,025	2,993	1,516	376	3,275	42	71	2,163	14,064
マレ首都圏	610	735	1,255	596	37	149	147	18	495	4,043
全世帯	1,214	1,520	2,312	1,155	243	2,050	83	50	1,509	10,138

出典 [MoT 2016: 21]

表9——国内観光旅行における合計支出の内訳

(単位 百万ルフィア)

	宿泊	飲食	航空運賃	海上交通	陸上交通	ショッピング	スポーツ・レクリエーション	文化活動	その他	合計
環礁部	66.5	84.1	124.2	62.9	15.6	135.9	1.7	2.9	85.8	584
マレ首都圏	16.3	19.7	33.6	15.9	1.0	4.0	3.9	0.5	13.2	108
全世帯	82.9	103.7	157.8	78.9	16.6	139.9	5.7	3.4	103.0	692

出典 [MoT 2016: 21]

モルディブ社会の国内観光において、リゾート文化は国際観光客向けとも重なりながらも、異なった姿をみせる。特に、海上・陸上のスポーツに対する高い需要があるとともに、自然アトラクションや文化活動に対する高い需要があることが見て取れる [MoT 2016: 21]。実際、モルディブ各地で展開するサーフィンやシュノーケリング、ダイビングをはじめとするマリンスポーツの数々や、各地の自然アトラクションや文化アトラクションを体験するプログラムは、国際観光客向けに展開しているものであるが、モルディブ人の多くも経験している。

17) 1米ドルを15.42ルフィアで計算。

本調査レポートでは、国内観光をしない理由についても質問している [MoT 2016: 32]。ここでは表 10 で示している通り、「興味がない」点や「仕事・家族の都合」、「国外旅行を好む」といった点が、いずれの区分においても高い割合を示している [MoT 2016: 32]。ここでは、経済的理由よりも、時間やライフスタイルにおける国内旅行の位置づけが障壁となっている点を示唆するものである。他方で、過半数以上のモルディブ国民が、観光や旅行に対して従来のような抵抗感を持っていないことをうかがわせる結果となっている。

表 10——国内観光をしない理由

(単位 %)

	環礁部	マレ首都圏	全世界帯
宿泊費の高さ	8.8	3.1	6.6
交通費の高さ	12.5	10.9	11.9
情報不足	0.0	0.4	0.2
興味がない	24.3	27.1	25.4
交通の貧弱さ	10.3	2.6	7.3
国外旅行を好む	20.6	10.9	16.8
仕事・家族の都合	21.3	38.4	28.0
その他	2.2	6.6	3.9

出典 [MoT 2016: 32]

モルディブ社会において国内観光が盛んになるなかで、ローカルな観光活動も展開されるようになってきた点が本調査レポートから読み取れる。そこでは、国際観光客向けに整備されてきた観光インフラを利用しながら、モルディブに特化したリゾート文化が構築されるようになってきている。さらに、従来は明確に分断されてきたグローバルなツーリズムとローカルな生活文化の在り方が、リゾート文化という枠組みのなかで交錯している姿が見て取れる。その際、単に西洋近代由来のリゾート文化をそのまま受容するのではなく、モルディブ社会の自然環境や価値規範・行動様式を反映したリゾート文化が構築されている。このモルディブ国民によって消費されるリゾート文化こそが、ヴァナキュラー・ツーリズムとして捉えることができるであろう。

## 2. サステナビリティを体現する、ヴァナキュラーなリゾート文化

モルディブにおける観光戦略の転換と環礁部における観光政策の展開のなかで、モルディブ国内のリゾート文化の意味づけも変化していく。従来は富裕層の国際観光客を受け入れるための環境整備とされてきたが、現在ではローカル文化を促進するための社会的実践としての側面が強調されている [MoT 2007, 2016, 2023a]。ここでは、リゾート文化がモルディブ社会におけるライフスタイルの一部として捉えられるようになってきている点が読み取れる。

このリゾート文化のローカル化の背景として、1島1リゾート戦略を通じて環境保全や貧困削減といった形でのサステナビリティの概念に、地域社会の価値規範の理解や価値を高めるため役割が付加されるようになった点があげられる [Scheyvens 2011; Shakeela & Weaver 2017; Muneeza et al. 2020]<sup>18)</sup>。特に、ツーリズムと地域社会を分離する観光戦略のなかで、モルディブ社会はサステ

18) 世界観光機関 (UNWTO) におけるサステナビリティの概念として、①生態系を維持して自然遺産と生物多様性を保全し、観光開発の鍵となる環境資源の最適な使用を図る、②地域の文化遺産と伝統的価値を保持して異文化間の理解と寛容性に努め、受入れ国の社会・文化的真正性を尊重する、③安定した雇用と収入を確保する機会と社会的サービスを含めて受入れ国の貧困削減に貢献し、すべての利害関係者に社会・経済的な利益が公平に分配されるような実現性のある長期的な経済運営を確保する、という3つの側面を適切にバランスを保ちながら観光振興を図っていくことを求める概念である [麻生 2019: 168]。

イナブル・ツーリズムやサステナビリティといった概念を積極的に用いることで、自らの観光振興のあり方を正当化しようとしてきた [Scheyvens 2011; Zulfa & Carlsen 2012; Giampiccoli et al. 2020; Scheyvens & Laeis 2022]。実際、地域社会の環境や文化といった社会生態システムを保全していくことを目指すこの観光戦略は、国際機関からの評価を受けるだけでなく、モルディブ社会のアイデンティティとしても受け入れられている [Scheyvens 2011; Shakeela et al. 2011; Shakeela & Weaver 2017]。

他方で、1999年の新モルディブ観光法によってローカル島への観光活動が解禁される過程で、各地の環礁においてホスト社会が独自に、ゲストハウスの開設や各種の観光アクティビティに従事することで、リゾート活動に参画していくようになる。その過程で、モルディブ観光省や各地のローカル島では、観光の負の側面を抑制しながら観光活動を図っていくコミュニティ・ベースド・ツーリズムの動きを活性化してきた点は、既に述べた通りである [MoT 2007: 58–60]。その際、ホストとなるローカル島の地域社会が保持する多様な文化や生活習慣と言った地域資源を生かすことによって、国内のリゾート文化のローカル化を推し進めてきた [MoT 2007; Scheyvens 2011; Shakeela et al. 2011; Muneza et al. 2020]。

ローカル島へとリゾート文化を広めていく過程で、モルディブ観光省はツーリズムやリゾート文化そのものが、地域社会の社会生態システムを持続させるサステナビリティの実践であると強調するようになる [MoT 2013, 2023a]。従来は環境保全や貧困撲滅という観点からのみ論じられてきたサステナビリティの概念が [MoT 2007]、ここでは地域社会や文化の保全と振興という概念とも結びついていく [MoT 2013, 2023a]。

それゆえ、モルディブ各地の観光地においてリゾート文化を楽しむことは、各環礁に息づく社会生態システムの保全と発展にも寄与する活動としての認識が広がりをもせていくことになる。そのなかでも、各環礁における自然や文化を楽しむリゾート文化は、個人の心身の健康や幸福を充実させていくだけでなく、地域社会の振興にもつながっていくことを強調していく [MoT 2013, 2023a; MHT 2023]。実際、モルディブ観光省は学校教育や従業員教育、観光イベントを通じて、モルディブ社会におけるあらゆる場面で、観光を通じたサステナビリティを実体化させていこうとする施策を展開してきた [MoT 2013, 2023a]。

地域の自然環境や文化規範の持続性というサステナビリティ概念と強固に結びついてくモルディブのリゾート文化は、モルディブ社会に共通するイスラーム的価値規範を体現するとともに、環礁ごとのヴァナキュラーな価値規範や行動様式を体現する実践となってきた。それは同時に、グローバルな社会における自らの立ち位置を確立する社会的実践としての役割も果たしている [Zahir 2021]。それゆえ、従来の研究で指摘されてきたことと異なり、グローバルなツーリズムやリゾート文化がモルディブ社会におけるヴァナキュラーな価値規範や行動様式を発信する役割を果たしていると捉えることができるであろう。

## V. おわりに

本論考では、モルディブにおける国内観光の発展を事例に、国際観光市場におけるヴァナキュラーなリゾート文化の形成について考察してきた。最後にこれまでの議論をまとめていきたい。

モルディブ社会においてツーリズムとは西洋近代由来の外來のものとして、地域社会の自然環境や価値規範・行動様式といった社会生態システムを破壊するものとして捉えられてきた。それゆえ、1島1リゾート戦略を通じて、国際観光客と地域住民の空間を国内で分断する政策を展開すること

で、地域社会のサステナビリティを確保しようとしてきた。しかし、ローカル島における観光活動が解禁される過程で、ホスト社会による地域資源を活用した多様なリゾート活動が展開されるようになっていった。ここでは特に、環礁部におけるマリンスポーツや自然環境を満喫するアトラクション、そして地域ごとの文化活動を楽しむリゾート文化が普及してきた。

この地域社会固有のリゾート文化が広がりを見せていく過程で、モルディブ社会が西洋近代の価値規範・行動様式に飲み込まれていく以上に、ヴァナキュラーな価値規範や行動様式を発信し、内面化するようになっていく点を見て取ることができる。特に、国内観光においてマレ首都圏の住民を中心に、環礁部のローカルな自然・文化体験のアクティビティを楽しんでいく過程で、リゾート文化がサステナビリティと強固に結びついていくとともに、モルディブ社会のアイデンティティとして内面化されていく姿を描き出してきた。

以上より、モルディブにおけるリゾート文化とは、地域社会におけるヴァナキュラーな自然環境や価値規範・行動様式を促進していくことで、サステナビリティを体現していく実践として機能するようになっていく、と結論づけることができる。そこでは繰り返しとなるが従来のリゾート文化で指摘されてきたような、西洋近代に立脚した価値規範を浸透させていく機能よりも、グローバルな環境下でのローカル文化を保全・促進する機能が備わるようになっていく。その際、国内観光によって促進されるヴァナキュラーな身体感覚や価値規範に基づいて消費される空間経験の蓄積が、ローカルなリゾート文化を形成していくと捉えることができるであろう。

他方で、ヴァナキュラーなリゾート文化もまた、グローバルなツーリズムという社会システムとの接触を経験することによって生み出された領域として捉えることができる。その点、現代社会におけるグローバルなツーリズムとヴァナキュラーな観光文化は分断された単純なものではなく、密接に関わり合いながら構築される一つの姿として捉えることができるであろう。

## 参考文献

- 麻生憲一 2019 「持続可能な観光」 白坂蕃・稲垣勉・小沢健市・古賀学・山下晋司(編)『観光の事典』朝倉出版, p. 168.
- 稲垣勉 2011 「観光地とリゾート——日常化する観光、通貨型から滞在型へ」 山下晋司(編)『観光学キーワード』有斐閣, pp. 70–71.
- アーリ, ジョン 1995 『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦(訳)法政大学出版局.
- エジャートン, ロバート B. 1993 『ビーチの社会学』和波弘樹・和波雅子(訳)現代書館.
- 江口信清 1998 『観光と権力——カリブ海地域社会の観光現象』多賀出版.
- コルバン, アラン 1992 『浜辺の誕生——海と人間の系譜学』福井和美(訳)藤原書店.
- 2010 『レジャーの誕生<新版> 上・下』渡辺響子(訳)藤原書店.
- シュタイネッケ, アルブレヒト 2018 『ドイツの観光学』富川久美子(訳)ナカニシヤ出版.
- 高寺奎一郎 2006 『国際観光論——平和構築のためのグローバル戦略』古今書院.
- 丁可 2021a 「観光産業——国家戦略としての観光開発」 荒井悦代・今泉慎也(編)『モルディブを知るための35章』明石書店, pp. 198–204.
- 2021b 「観光産業と経済発展——重要な収入源と弱い波及効果のジレンマ」 荒井悦代・今泉慎也(編)『モルディブを知るための35章』明石書店, pp. 205–211.
- ナッシュ, デニソン 2018 「帝国主義の一形態としての観光」 V. スミス(編)『ホスト・アンド・ゲ

- スト——観光人類学とはなにか』(市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也訳), ミネルヴァ書房, pp. 47–68.
- 濱田美紀 2021a 「拡大する経済——貿易赤字をリゾートで稼ぐ」荒井悦代・今泉慎也(編)『モルディブを知るための35章』明石書店, pp. 174–180.
- 2021b 「産業と貿易——リゾートと魚の国」荒井悦代・今泉慎也(編)『モルディブを知るための35章』明石書店, pp. 181–186.
- ボワイエ, マルク 2006 『観光のラビリンス』成沢広幸(訳)法政大学出版局.
- ミッチェル, ティモシー 2014 『エジプトを植民地化する——博覧会世界と規律訓練的権力』(大塚和夫・赤堀雅幸訳)法政大学出版局.
- 箕輪佳奈恵 2019 「モルディブ共和国における美術文化の新潮流——『伝統』と『現代』の境界を越えた再定位の試みとして」『美術教育学研究』51(1), pp. 321–328.
- 森本慶太 2023 『スイス観光業の近現代——大衆文化をめぐる葛藤』関西大学出版会.
- 安田慎 2016 『イスラミック・ツーリズムの勃興——宗教の観光資源化』ナカニシヤ出版.
- Buckley, R. C., D. A. Guitart, and A. Shakeela. 2017. “Contested Surf Tourism Resources in the Maldives,” *Annals of Tourism Research* 64, pp. 185–199.
- Cooper, C. P., and I. Ozdil. 1992. “From Mass to ‘Responsible’ Tourism: The Turkish Experience,” *Tourism Management* 13(4), pp. 377–386.
- Cowburn, B., C. Moritz, C. Birrell, G. Grimsditch, and A. Abdulla. 2018. “Can Luxury and Environmental Sustainability Co-exist? Assessing the Environmental Impact of Resort Tourism on Coral Reefs in the Maldives,” *Ocean & Coastal Management* 158, pp. 120–127.
- Din, K. H. 1989. “Islam and Tourism: Patterns, Issues, and Options,” *Annals of Tourism Research* 16(4), pp. 542–563.
- Domroes, M. 2001. “Conceptualising State-controlled Resort Islands for an Environment-friendly Development of Tourism: The Maldivian Experience,” *Singapore Journal of Tropical Geography* 22(2), pp. 122–137.
- Galan, J., F. Bourgeau and B. Pedroli. 2020. “A Multidimensional Model for the Vernacular: Linking Disciplines and Connecting the Vernacular Landscape to Sustainability Challenges,” *Sustainability* 12(16), No. 6347.
- Giampiccoli, A., B. A. Muhsin, and O. Mtapuri. 2020. “Community-based Tourism in the Case of the Maldives,” *Geo Journal of Tourism and Geosites* 29(2), pp. 428–439.
- Hazbun, W. 2008. *Beaches, Ruins, Resorts: The Politics of Tourism in the Arab World*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Henderson, J. C. 2008. “The Politics of Tourism: A Perspective from the Maldives,” *TOURISMOS: An International Multidisciplinary Refereed Journal of Tourism* 3(1), pp. 99–115.
- Kundur, S. K. 2012. “Development of Tourism in Maldives,” *International Journal of Scientific and Research Publications* 2(4), pp. 1–5.
- MHT (Maldives Halal Travel). 2023. “Exploring the Maldives: Embrace Authenticity on Local Islands,” *Maldives Halal Travel*. <<https://www.maldiveshalaltravel.com/news/206>> (2023年12月18日閲覧).

- MoT (Ministry of Tourism and Civil Aviation, Republic of Maldives). 2007. *Maldives Third Tourism Master Plan 2007–2011*. Malé: Ministry of Tourism and Civil Aviation, Republic of Maldives.
- . (Ministry of Tourism, Arts and Culture, Republic of Maldives). 2013a. *Maldives Fourth Tourism Master Plan 2013–2017: Strategic Action Plan* (Volume 1). Malé: Ministry of Tourism, Arts and Culture.
- . 2013b. *Maldives Fourth Tourism Master Plan 2013–2017: Background and Analysis* (Volume 2). Malé: Ministry of Tourism, Arts and Culture.
- . (Ministry of Tourism, Republic of Maldives). 2016. *Study on Domestic Tourism in the Maldives 2016*. Malé: Ministry of Tourism.
- . 2019. *Tourism Year Book 2019*. Malé: Ministry of Tourism.
- . 2023a. *Maldives Fifth Tourism Master Plan 2007–2011*. Malé: Ministry of Tourism.
- . 2023b. <<https://www.tourism.gov.mv/>> (2023年12月18日閲覧).
- Muneeza, A., Z. Mustapha, F. Nashwa Badeeu, and A. Reesha Nafiz. 2020. “Need to Pioneer Islamic Tourism in Tourist Resorts in Maldives,” *Journal of Islamic Marketing* 11(4), pp. 895–916.
- Prideaux, B. 2000. “The Resort Development Spectrum: A New Approach to Modeling Resort Development,” *Tourism Management* 21(3), pp. 225–240.
- Richins, H. 2009. “Environmental, Cultural, Economic and Socio-community Sustainability: A Framework for Sustainable Tourism in Resort Destinations,” *Environment, Development and Sustainability* 11, pp. 785–800.
- Ritter, W. 1975. “Recreation and Tourism in the Islamic Countries,” *EKISTICS: Reviews on the Problems and Science of Human Settlements* 40(236), pp. 56–59.
- Robinson, J. J. 2015. *The Maldives: Islamic Republic, Tropical Autocracy*. London: Hurst Publications.
- Scheyvens, R. 2011. “The Challenge of Sustainable Tourism Development in the Maldives: Understanding the Social and Political Dimensions of Sustainability,” *Asia Pacific Viewpoint* 52(2), pp. 148–164.
- Scheyvens, R., and J. Momsen. 2008. “Tourism in Small Island States: From Vulnerability to Strengths,” *Journal of Sustainable Tourism* 16(5), pp. 491–510.
- Scheyvens, R., and G. Laeis. 2022. “Linkages between Tourist Resorts, Local Food Production and the Sustainable Development Goals,” in L. S. Harnng, M. Mostafanezhad and J. M. Cheer (eds.), *Recentering Tourism Geographies in the ‘Asian Century’*, London: Routledge, pp. 139–161.
- Shakeela, A., L. Ruhanen, and N. Breakey. 2010. “Women’s Participation in Tourism: A Case from the Maldives,” in D. Scott and J. A. Jafari (eds.), *Tourism in the Muslim World*. London: Emerald Group Publishing Limited, pp. 61–71.
- . 2011. “The Maldives: A Sustainable Tourism Success Story?,” *E-review of Tourism Research* 9(5), pp. 243–264.
- Shakeela, A. and D. Weaver. 2012. “Resident Reactions to a Tourism Incident: Mapping a Maldivian Emoscape,” *Annals of Tourism Research* 39 (3), pp. 1337–1358.
- . 2017. “The Maldives: Parallel Paths of Conventional and Alternative Tourism,” in C. M. Hall and S. J. Page (eds.), *The Routledge Handbook of Tourism in Asia*. London: Routledge, pp. 265–274.

- Singh, S. 2004. "India's Domestic Tourism: Chaos/Crisis/Challenge?," *Tourism Recreation Research* 29(2), pp. 35–46.
- Travis, A. S. 2011. "Maldives' Tourism Development: A Test Case in the Indian Ocean for Conservation and Economic Development in an Islamic State (RMP towards STP)," in A. S. Travis (ed.), *Planning for Tourism, Leisure and Sustainability: International Case Studies*. Wallington: CABI, pp. 70–74.
- Zahir, H. 2021. *Islam and Democracy in the Maldives: Interrogating Reformist Islam's Role in Politics*. London: Routledge.
- Zulfa, M. and J. Carlsen. 2012. "Planning for Sustainable Island Tourism Development in Maldives," in J. Carlsen and R. Butler (eds.), *Island Tourism: Sustainable Perspectives*. Wallington: CABI, pp. 215–227.